

研究ノート

『集史』第1巻「モンゴル史」のアムバカイ・カンと
トドエン・オッチギンの挿話

宇野伸浩

(受付 2009年11月2日)

はじめに

筆者は最近、『集史』第1巻「モンゴル史」の種々の校訂テキストについて再検討を行った。再検討するにあたって、すでに刊行されている校訂テキストと筆者がこれまでに調査した写本とを突き合わせ、各校訂テキストがどの写本をどのように校訂して作成されたか、その結果として各校訂テキストにどのような長所と短所があるかについて検討するという方法をとった。その成果は『『集史』第1巻「モンゴル史」の校訂テキストをめぐる諸問題』（宇野伸浩 2011）としてまとめ、現在発表する用意をしている¹⁾。

その検討の過程において、『集史』第1巻「モンゴル史」の中のある挿話が、どの校訂テキストにおいても脱落していることに気がついた。幸い、スミルノヴァのロシア語訳（Смирнова 1952, pp. 23–25）にはこの挿話が存在するので、その挿話の内容は、ロシア語訳およびそれに基づく中国語訳（余大鈞・周建奇 1983, pp. 25–28）によってすでに知られている。しかし、その挿話のペルシア語原文を参照することは、現行の校訂テキストでは不可能である。

挿話の内容は、チンギス・カンの2～3世代上の時代にあたり、タイチウト族のアムバカイ・カンがタタル族に行き、捕えられて金朝に送られ処刑されたという有名な事件に関連する話である。そのときアムバカイ・カンに同行してタタル族に赴いた人物に、チンギス・カンの祖父バルタン・バアタルの弟（カブル・カンの末子）のトドエン・オッチギンがいた。彼はカブル・カンの末子にあたるため、オッチギンという称号を持つ。彼もタタル族に捕えられそうになるが、かろうじて免れ逃げ帰ることができた。この挿話は、チンギス・カンの数世代上の時代のモンゴル族とタタル族の関係、モンゴル族内のキヤト族とタイチウト族の関係などを考える上で興味深い史料である。

そこで、本稿では、その挿話が現行のすべての校訂テキストから脱落した理由を解説する

1) 宇野伸浩 2011 は、早稲田大学の吉田順一氏に指導を受けた研究者が中心となって2011年に刊行を予定している『モンゴル史研究のパーспекティブ』（仮称）に掲載される予定である。

とともに、2写本のペルシア語原文を校訂してテキストの試案を作成し、その挿話の概要を付して紹介することとしたい。

1. 現行の校訂テキストから当該の挿話が脱落している理由

本稿で取り上げるアムバカイ・カンとトドエン・オッチギンの挿話は、『集史』第1巻「モンゴル史」の中の「ドトゥム・メネンの息子カイドウ・カンと彼の息子たちの話」の「第1部 序文：彼と彼の息子たちの生涯」に登場する。この「ドトゥム・メネンの息子カイドウ・カンと彼の息子たちの話」を含む校訂テキストとしては、ベレジンのテキスト（Березин 1868）、カーミーのテキスト（Karīmī 1959）、ロウシャンのテキスト（Rawshan 1994）の3種類がある。しかし、そのどのテキストにおいてもこの挿話は脱落している（Березин 1868, p. 31; Karīmī 1959, p. 179; Rawshan 1994, p. 236）。その理由は二つに分かれる。ベレジンとカーミーのテキストから脱落した理由は共通しているが、ロウシャンのテキストから脱落した理由は別の理由である。

まず、ベレジンとカーミーのテキストから脱落した理由から述べてみたい。その理由は、この2つの校訂テキストが利用した写本にこの挿話が含まれていなかったからである。白岩氏と筆者が明らかにしたように、『集史』第1巻「モンゴル史」には、初版と増補版がある（白岩一彦 1993, 白岩一彦 1997, 白岩一彦 1998, 宇野伸浩 2003a）。増補版は、初版にはない増補記事を含んでいる。ここで取り上げる「アムバカイ・カンとトドエン・オッチギンの挿話」は、その増補記事の一つである（白岩一彦 1993, pp. 63–64）。一方、ベレジンの校訂テキストは、初版系統の写本を利用して作成されたテキストであり²⁾、当然増補記事であるこの挿話を含んでいない。カーミーの校訂テキストは、この部分はベレジンの校訂テキストに基づいているので、従って、カーミーのテキストも増補記事であるこの挿話を含んでいないのである³⁾。

一方、ロウシャンの校訂テキストは、増補版系統の写本であるトプカプ 1518 を底本としている。従って、増補記事の1つである「アムバカイ・カンとトドエン・オッチギンの挿話」を含んでいてもよいはずである。ところが、ロウシャンのテキストの該当箇所を見てみると、校訂過程で混乱があったらしく、底本としたトプカプ 1518 にこの挿話があるにもかかわらず、

2) ベレジンが利用した写本は、サンクト・ペテルブルグ St.-Petersburg の東洋写本研究所 Институт восточных рукописей (Institute of Oriental Manuscripts) 所蔵の MS.D66 をはじめとする4写本であり、筆者は未見であるが、そのいずれもが初版の系統の写本であつたらしく、ベレジンのテキストは、増補版のみにある増補記事を含んでいない。これについては、宇野伸浩 2011 において詳しく述べたので、そちらを参照していただきたい。

3) この点についても、宇野伸浩 2011 において詳しく述べたので、参照していただきたい。

ロウシャンのテキストではこの挿話が脱落してしまっている (Rawshan 1994, p. 236)。

以上の理由から、現行の校訂テキストには、この挿話のペルシア語原文が含まれていないのである。

2. 挿話の概要と校訂テキスト試案

筆者がこれまでに調査することができた増補版系統の写本は、ウズベキスタン 1620, トプカプ 1518, オーストリア国立 326 の3写本であり、そのうち最も良写本とされるのはウズベキスタン 1620 である。ところが、ウズベキスタン 1620 は、残念ながら fol. 51–54 が欠落しており、この挿話はちょうどその欠落葉にあたるため、ウズベキスタン 1620 は利用できない。

そこで、ここではトプカプ 1518 とオーストリア国立 326 を校訂して、テキストの試案を示してみたい。該当するフォリオは、トプカプ 1518, fol. 50a, 1.8~fol. 50b, 1.8 およびオーストリア国立 326, fol. 51b, 1.6~fol. 52a, 1.4 である。ロシア語訳とその脚注 (Смирнова 1952, pp. 23–25) を参考にした。

この挿話の主人公であるトドエン・オッチギン Tödö'en Otčigin は、『元朝秘史』48節に登場し、カブル・カンの7番目の息子とされている。『集史』では Tūdān Ūtčgīn と綴られ、若干音が異なる。また、カブル・カンの6番目の息子とされている。ただし、末子であることは両史料で共通している。

挿話の概要は、次のとおりである。

アムバカイ・カンが3番目の息子テムル・ユラキのために、チャガン・タタル族から娘を娶ることを望んだ。一緒に娘をもらいに行くことを親族・知人に頼むと、カブル・カンの6番目の息子でありイエスゲイ・バートルの叔父であるトドエン・オッチギンが同行することになった。トドエン・オッチギンの従者の中に、チンタイ・キヤンという賢い男がいた。途中でアムバカイ・カンの赤毛の馬が倒れると、チンタイ・キヤンが行くのをやめるように忠告し、トドエン・オッチギンがアムバカイ・カンに伝えるが、アムバカイ・カンは気にせずに出発した。次の日の夜、バヤウト・ドクラト族のところに到着し、ヒツジを料理すると、釜が壊れた。またチンタイ・キヤンが忠告したが、アムバカイ・カンは忠告を聞かなかった。タタル族のところに到着すると、宴会が行われており、部族長のモンケ・ジャウト・クリがトドエン・オッチギンを10日間宴会に招待した。10日目の宴会の最中に、タタル族の長から使者が到着し、モンケ・ジャウト・クリの耳に伝言した。それに気付いたチンタイ・キヤンは、トドエン・オッチギンに泣いて帰ることを懇願した。チンタイ・キヤンは、使者がモンケ・ジャウト・クリに、自分たちはアムバカイ・カンを捕まえたので、トドエン・オッチギンを捕える

ようにと求めていることを知っていた。トドエン・オッチギンが悩んでいる間に、数人のアミールがモンケ・ジャウト・クリの家に入って来て、陰謀をやめてトドエン・オッチギンを逃すように求めた。モンケ・ジャウト・クリはそれを承諾して、トドエン・オッチギンを呼んで、すぐに帰るように勧め、馬に乗せ、急ぐように忠告した。

トドエン・オッチギンが日夜馬を馳せ、真夜中にも進んで、バヤウト・ドクラト族のところに到着すると、彼らはアムバカイ・カンとトドエン・オッチギンが捕えられたという噂を聞いていたため驚いた。トドエン・オッチギンはそこで疲れていた馬を交換してもらい、バヤウト・ドクラト族の馬に乗って、無事家に到着した。

軍を進軍させたタタル族は、そのことを知って、バヤウト・ドクラト族を殺し略奪した。またアムバカイ・カンを、中国の皇帝のもとに送り、殺した。その知らせが、トドエン・オッチギンのもとに届くと、一族が集合して復讐を誓い、クトラ・カンが軍を率いて、中国人を打ち破った。

و سبب آنک اقوام تاتار او⁴⁾ را بگرفتند آن بوده که او را از برای پسر سومین خود تیمور یورکی نام دختر قایر قوت بویروقوت مقدم قوم جغان تاتار خواسته بود، بعد از یکچندی خواسته که دختر را کوچ کند و گله بگیرند، *خویشان و دوستان خود را خبر کرده تا با او بهم بروند و گله بگیرند⁵⁾ و تودآن اوتجکین که پسر ششم قبل خان بود عم بیسوکای بهادر و او عم زاده همبقای قآن⁶⁾ طلب داشته و باتفاق با هم رفته اند و از ملازمان تودآن اوتجکین **جینتای قیان⁷⁾ نام که مردی عاقل و کابی بود مصاحب ایشان بوده ناگاه اسب جیرده⁸⁾ همبقای قآن سقط شده جینتای قیان⁹⁾ با تودآن اوتجکین گفته که من سقط شدن این اسب را بفال نیکو نمی دانم مصلحت رفتن نیست و¹⁰⁾ او با همبقای قآن گفته و اوالنقات ننموده و رفته و دیگر شب بقوم بایات دوقلات رسیده اند¹¹⁾، ایشان گوسپندی ارک¹²⁾ کشته¹³⁾ می پختند،

4) このおはアムバカイ・カンを指す。

5) オーストリア国立 326: *~5 脱落。

6) オーストリア国立 326: او عم زاده همبقای قآن بوده

7) この人物名は、箇所によって綴りが違うが、トプカプ 1518 のこの箇所が最も綴りが正確である。ロシア語訳に従い、Čintāi qīyān と読む。

8) جیرده は『元朝秘史』255節の je'erde に当たり、「赤馬」のこと。Doerfer 1963–1975, vol. 1, p. 289, جرده の項参照。

9) オーストリア国立 326: ** ~9 脱落。

10) オーストリア国立 326: و 脱落。

11) オーストリア国立 326: اند 脱落。

12) トルコ語 irk 「オス羊」に当たる。Clauson によれば、とくに3歳のオス羊を意味するという。Clauson 1972, pp. 220–221 参照。

13) オーストリア国立 326: کشته 脱落。

ناگاه ديگ شكسته جينتای قيان¹⁴⁾ باز همان سخن با تودآن اوتجکين¹⁵⁾ گفته و گفته تا با همبقای قآن بگوید، چون با او گفته همبقای قآن نپسندیده و گفته چرا هر روز فال بد می زنی این چه سخن باشد و روان شد، چون بقوم تاتار رسید و بخانه فرو آمد و بطوی مشغول شدند، مقدم قوم که در آن حدود بودند نام او¹⁶⁾ مونکا جاووت و قوری تودآن اوتجکين را طلب داشت و ده روز او را طوی می کرد، در روز دهم چاشتگاه در میان طوی ایلچی از مقدم قوم تاتار رسید و¹⁷⁾ سخنی چند در گوش مونکاجاووت قوری می گفت و بیرون رفت، جينتای قيان¹⁸⁾ آن را در یافت و بگریست و با تودآن اوتجکين گفت ما در خانه خود گله و رمه و آش نداشتیم بچه احتیاج اینجا آمديم همانا عمر تو باخر رسیده، چنان فهم کرد که ایلچی بدان آمده کی¹⁹⁾ ما همبقای قان را گرفتیم شما نیز تودآن اوتجکين را بگیری و باید کی²⁰⁾ چریک بر نشیند و ایلچی بآن کار می رود و تودآن اوتجکين عظیم متفکر شد، در آن حال²¹⁾ چند امیر بر در خانه آمدند و با منکاجاووت قوری²²⁾ گفتند عواقب چنین کارها بد باشد و جهت فرزندان دشمن اند وختن تنها اوتجکين نیست قوم و قبیله او بسیار اند و میان جانبین فتنه و عداوت قایم گردد امراء جغان تاتار دانند با قوم خود ما این تودآن را²³⁾ تعرض نرسانیم و باز گردانیم و منکاجاووت قوری آن سخن را قبول کرد و تودآن را از خانه دیگر که او را فرو آورده بود طلب داشت او بجهت سخن جنتای قيان متوهم شد و احتیاط را کرد در آستین کشید، چون آنجا رفت مونکاجاووت قوری گفت ***تودآن قوده حالی باز گرد من بعد چون سلامتی باشد گله بگیریم و او را بر نشاند و تشنیع کرد و گفت می²⁴⁾ باید که در رفتن اهمال نمایی و زود روی²⁵⁾ که مصلحت در آنست ****چه از بداندیش و یاغی باد²⁶⁾ می برد بگیر چیزی نیست، این نصیحت بکرد و باز گردید و دو نوکار²⁷⁾ که پیش از آن ایشان را بطلب تودآن اوتجکين فرستاده بود هر دو توقف کردند با وی گفتند کی²⁸⁾ دی روز

14) トブカブ 1518: حتای قيان, オーストリア国立 326: حيتای قيان

15) オーストリア国立 326: اوتجکين

16) トブカブ 1518: نام

17) オーストリア国立 326: که و

18) トブカブ 1518: حتای قيان, オーストリア国立 326: حيتای قيان

19) オーストリア国立 326: که

20) オーストリア国立 326: که

21) トブカブ 1518: حالت

22) トブカブ 1518: منکاجاووت قوری

23) オーストリア国立 326: را 脱落。

24) オーストリア国立 326: ***~24 脱落。

25) オーストリア国立 326: زود در روی

26) この部分はやや意味が取りにくいから、トブカブ 1518 に従い ば と読んでおく。

27) オーストリア国立 326: ****~27 脱落。

28) オーストリア国立 326: که

ایلجی بدان آمده بود که همبقای قآن را گرفتیم شما نیز تودآن اوتجکین را بگیرید²⁹⁾ نام منع کرد این زمان می³⁰⁾ باید که اسب را دریغ نا داشته بتعجیل تمام برانی تا خلاص مانی³¹⁾، از چاشتگاه تا شب براند³²⁾ و نیم شب باز³³⁾ بر نشست و می رفت، چون بقوم بایات دوقلات رسید گفتند کی چنان آوازه است که همبقای قآن و تودآن اوتجکین را گرفته اند این حال چگونه است، تودآن گفت اگر چنان³⁴⁾ بودی چگونه اینجا رسیدمی، بعد از آن اسپان مانده را آنجا بگذاشت³⁵⁾ و اسپان ایشان را بر نشست و بزودی بسلامت بخانه رسید، چریک تاتار کی³⁶⁾ بر نشسته بودند واقف شدند کی³⁷⁾ قوم دوقلات³⁸⁾ اسپان خود را به اوتجکین داده اند تا بیرون رفته، بدان سبب ایشان را بکشند و ذغارت کردند و اقوام تاتار همبقای قآن را پیش پادشاه ختای سوسه نام³⁹⁾ فرستادند تا او را هلاک کرد و چون آن خبر به تودآن اوتجکین و خویشان رسید جمله جمع شدند و بر کینه⁴⁰⁾ خواستن از سوسه متفق گشتند، قوتله قآن⁴¹⁾ باشلامیشی کرده برفت و ختانیان را بشکست و این حکایت در موضع خویش مشروح نوشته است و آمدم با سر سخن.

3. おわりに

最後に、このアムバカイ・カンとトドエン・オッチギンの挿話が述べられている箇所について言及しておきたい。この挿話は、前述のように、増補記事として後から挿入されたものであるが、挿入するときに挿入箇所を誤ったように見える。なぜなら、トドエン・オッチギンは、キヤト族の祖カブル・カンの息子であり、『集史』では、上述のようにトダン・オッチギン Tūdān Ūtçgīn と表記されている。ところが、この挿話が挿入された箇所は、タイチウト族のアムバカイ・カンの息子カダン・タイシの息子トダについて述べた記事の途中なの

29) オーストリア国立 326: که شما تودان را بگیرید

30) オーストリア国立 326: می 脱落。

31) オーストリア国立 326: بابی

32) トブカプ 326: بر آید

33) オーストリア国立 326: بآن

34) オーストリア国立 326: چنین

35) トブカプ 1518: آنجا بگذاشت 脱落。

36) オーストリア国立 326: که

37) オーストリア国立 326: که

38) オーストリア国立 326: توقلات

39) トブカプ 1518: پادشاه سوسه

40) オーストリア国立 326: بکینه

41) トブカプ 1518: قوتلای قآن

である。これは明らかに、トダン・オッチギンとトダを混同して、挿入してしまった可能性が高い。このように、増補版を作成する際に、誤った箇所に増補記事を挿入した可能性があることについては、筆者が『集史』「部族編」タタル族の記事について指摘したことがある⁴²⁾。このように、増補版『集史』は、完成版でありながら、内容に混乱を含んだ完成版であることに注意する必要があるであろう。

《『集史』写本一覧》

- ウズベキスタン 1620：ウズベキスタン共和国科学アカデミー東洋学研究所 Abu Rayhon Beruni Institute of Oriental Studies, Tashkent, MS. 1620.
トブカプ 1518：トブカプ・サライ博物館附属図書館 Topkapı Sarayı Müzesi, Kütüphanesi, MS. Revân köşkü 1518.
オーストリア国立 326：オーストリア国立図書館 Österreichische Nationalbibliothek, Wien, MS. Codex vindobonensis palatinus mxt 326.
東洋写本 D66：東洋写本研究所 Институт восточных рукописей (Institute of Oriental Manuscripts), St.-Petersburg, MS.D66 (筆者未見)
トブカプ 282 (『ハーフェズ・アブル全書』所収『集史』)：Majmū‘ a-yi Hāfız Abrū. Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi, MS. Bagdād köşkü 282.

《『集史』校訂テキスト・翻訳一覧》

- Березин, И.Н. (ed.) 1858–1888. *Сборник летописей, История монголов. Сочинение Рашид-Эддина.* (ТВОРАО, ч.V, 1858, ч.VII, 1861, ч.VIII 1868, ч.XV, 1888) С.-Петербург.
Karīmī, B. (ed.) 1338/1959, *Rashīd al-Dīn, Jāmi‘ al-Tavārīkh.* 2 jild., Tehran.
Rawshan, M. & Mūsawī, M. (ed.) 1373/1994. *Jāmi‘ al-Tavārīkh.* 4 vols, Tehran.
Смирнова, О.И. 1952. *Рашид-ад-Дин, Сборник летописей,* Том I, кн. II, М.-Л.
Thackston, W.M. 1999. *Rashiduddin Fazlullah, Jami‘ u‘t-Tawarikh: Compendium of Chronicles; A History of the Mongols.* 3 vols, (Sources of Oriental Languages and Literatures 45) Cambridge.
余大鈞・周建奇 (訳) 1983 『史集 第一卷第二分冊』北京：商務印書館。

《参 考 文 献》

宇野伸浩

- 2002 『『集史』イラン国民議会図書館写本の欄外の加筆』松田孝一 (編) 『碑刻等史料の総合的分析によるモンゴル帝国・元朝の政治・経済システムの基礎的研究 平成12～13年度学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (B) (1) 研究成果報告書』。
2003a 「ラシード・ウッディーン『集史』の増加加筆のプロセス」『人間環境学研究』1-1・2。
2003b 「イスラム議会図書館における『集史』写本調査」『日本モンゴル学会紀要』33。
2006a 「ラシードウッディーン『集史』第1巻「モンゴル史」の諸写本に見られる脱落」『人間環境学研究』5-1。
2006b 「ウズベキスタン共和国科学アカデミー東洋学研究所における『集史』写本調査」『日本モンゴル学

42) 宇野伸浩 2003, p. 50.

会紀要』36.

2011(予定) 『『集史』第1巻「モンゴル史」の校訂テキストをめぐる諸問題』『モンゴル史研究のパスベクタイプ』(仮称)。

白岩一彦

1991 『『集史』パリ写本 (Supplément persan 1113) について』『オリエント』34-1.

1993 『『集史』テヘラン写本 (イラン国民議会図書館写本2294番) について』『オリエント』36-1.

1995 『『集史』研究の現状と課題』『日本中東学会年報』10.

1997 「歴史家ラシード・ウッディーンの生涯と著作 (資料紹介)」『アジア資料通報』35-2.

1998 「ラシード・ウッディーン『歴史集成』イラン国民議会図書館写本の成立年代について』『オリエント』40-2.

2000 「ラシード・ウッディーン『歴史集成』現存写本目録』『参考書誌研究』53.

Clauson, G..

1972 *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth-Century Turkish*, Oxford.

Doerfer, G..

1963–1975 *Türkische und mongolische Elemente im Neupersischen*. 4 vols, Wiesbaden: Franz Steiner Verlag GmbH.

謝辞 本稿をまとめるに当たり、高木小苗氏にご教示いただいた。記して感謝の意を表したい。